

原別川(青森県)

思い出の川, そして現在

鹿内 丞

(私は社会人として ICU に入学し、年齢は 40 歳を超えています。このレポートはすべて私の記憶を基に書いています。)

私の思い出の川は、青森市の実家から 20m 程度の距離に位置する原別川である(Web サイトで紹介されるような川ではない:位置については別添 1 地図を参照)。この実家には中学校入学と同時に入居し、高校卒業まで過ごしたのであるが、思い出はそれ以前に遡る。

この川について非常に印象が強いことがある。それは、お盆になると近くの神社で盆踊りが行われるのであるが、その踊りに参加するため、そしてそれに伴う出店を楽しむためにその川にかかった橋を渡るのである。盆踊りを行う時間であるから時間的には当然夕方以降であり、当時小学生であった私は暗闇の中一人でその川を渡ることはできず、家族の後についていくことが精いっぱいであり、周りを見渡す余裕もなかった。川の周辺は街灯がほとんどなく、懐中電灯の明かりを頼りに前に進むという状況であった。

実はこのルートは「裏道」であり、川を渡ったあとも民家の裏、そして畑の合間にある真っ暗な小道を進むという小学生にとっては過酷な、恐怖を感じさせる道であった。この印象のためか、私は昼間であってもこの道を辿ったという記憶がほとんどない。私にとってこの道は、神社に行くための「夜の道」だったのである(これはある意味「神聖」な道であったようにも思う)。川には長さ 5m 程度の幅の細い橋がかかっていたが、川の上だけ暗闇は一層強まり、恐怖は助長されるため、いつも橋のうえを駆け抜けていた。そのため、下に川が存在することを確認もしなかったのである。

しかしながら、この川については恐怖の記憶だけではない。その当時は、ホタルがあたりまえに飛んでいる時代であった。恐くて先を急ぎたい状況にありながら、あちらこちらで光るホタルを見ては、家族が先に行ってしまったのにも気がつかずホタルをつかまえようと道を逸れてしまったものである。気がついた時には家族ははるか先を歩いており、泣きべそをかきながら後を追った。

さて、中学生・高校生になってもこの川に対する印象はほとんど変わらない。なぜなら、中学校と高校はこの川と全く逆の方向に位置しており、日常生活上、目にすることはほとんどなかったからである。そして、小学生の時には盆踊りや出店を目当てに渡ったあの橋を渡ることもほとんどなくなってしまった。川は草木で覆われており、よっぽど興味がなければその全貌を明らかにしたいという気も起きない。そのため、川の周辺の町並みがどうなっているのかを知ろうという気も起らない。(今思うと)川は私たちの生活との交流を拒んでいたのかもしれない。このような川の印象が、現在の神秘的で「神聖」なイメージをいっそう強めている。このように、この川はすぐ近くにありながら別世界の存在のまま、私は学生生活を終えるのである。

その当時の青森市は降雪量が多く(現在でも他県に比べ雪の量は多いが)、雪の捨て場



に困っていた。現在のように屋根に融雪用のヒーターがついているわけでもなく、自然に積もった雪、そして屋根から落ちた雪をどこかに捨ててはいけない。そうしなければ、家は雪で覆われてしまう。まず一つの方法が、道路の除雪のためのブルドーザー稼働に合わせ、道路に雪を出し、持って行ってもらうのである。この場合は、近隣の家も総出で雪かきである。このタイミングを逃すと次はいつ来るかわからない。落ちてきた雪の重みで家が潰されないように、みんな自分の家を守るために必死である。この必死の努力にもかかわらず雪は降り続く。市の除雪予算も限りがあるため、雪が降った都度ブルドーザーは出動できないのである。

さて、ブルドーザーが来ない時の頼りは川である。実は、前述の思い出の川と逆の方向にもう一つ小さな川がある(第2の川とします)。幅は2mもあるだろうか。そのため、私はこれを「川」と感じたことはなく、単なる「排水路」としか思ったことがない。それはともかく、私は雪を捨てる場所としてこの第2の川を選んでいて、それは近隣の家も同様であり、実のところ思い出の川に近い家もわざわざ遠い第2の川に雪を捨てていた(この理由は定かではないが、思い出の川の周辺は整備されていなかったため、雪を捨てる場所としてはやや労力を必要とするとともに、雪をすてる作業が危険であったことが一つの理由のようである)。

このように、雪が第2の川に集中して捨てられることにより不都合が生じた。川が雪で埋まってしまうのである。これはこの第2の川に限ったことではなく、他の川でも起こっていた事象であった。悪いことにこの状況は非常に危険な環境を生み出す。まず一つは、一見してどこが川かわからなくなるのである。事実、この川に車やブルドーザーが落ちている状況を何度も目にした(この当時、道路と川の境にガードレールは存在しなかった)。別の危険な状況としては、川の上は雪で埋まっても、その下の川の水は変わらず流れているのである。雪かき作業で川に雪を捨てに行った人が行方不明になり、何日かして海で発見されたというニュースは何回か耳にしたものである(川に落ちる場合、その部分だけ雪が抜け落ちることが多く、人が川に落ちたという事実を周囲の人は気付かないのである)。私もこの第2の川に雪を捨てている際に、乗っていた雪が沈み、川の水に落ちた経験がある。幸いこの川は浅いため、大事には至らなかった)。このように、川は私達の生活に非常に重要な存在だったのである。

思い出の川が私の人生に組み入れられ始めたのは、社会人になって2年ぐらい経ってからである(その時点で私は独立しており、家を訪れるのはお盆や正月の長めの休みがある時ぐらいとなった)。その理由は、川に整備工事が施されたため、その姿を露わにしたのである。川の幅は10m程度に拡張され、周りの木々も伐採されたため、川の全容が一望できるようになったのである。私はその時初めて川がどのように流れ、周囲の家がどれほど隣接していたのかを知った。川は今も昔もそこにあっただけにもかかわらずである。

この川が整備されたことにより、一つ楽しみが増えた。それは冬になると、雁や白鳥がやってきて寝場所にすることである(添付写真参照)。私の父は写真を撮るのが趣味であったため、暇さえあればその鳥たちを撮っていたし、近くの子供はパンの残りものを持ってきては与えていた。この姿を変えた川は、冬に里帰りした私にとって束の間の休息の場となった。子供の頃にあれほど近寄り難かった川がこのように変貌するとは思わなかった。

川の整備に伴い「裏道」であった道も少し整備され、昔のように真っ暗な道ではなくなった(相変わらず裏道であるため、整備されたのは道ではなく宅地の方であろう)。街灯も増えたため、夜になっても川沿いの道を歩いて近くのコンビニエンスストアに行くことができるようになった。これは大人になって恐怖を感じるものがなくなったからではなく、明らかに川および周辺が整備されたことにより歩きやすくなったのである。

さて、このように渡り鳥たちが住まいとする川に変身した原別川であるが、昔と比べて良くなったのだろうか。この答はわからない。確かに整備工事が行われたことにより、川の周辺は開け、人の行き来も以前に比べ自由になった。川の拡張により大雨による増水があっても溢れることはないだろう。雪も捨て放題である（現在は第2の川に隣接してアパートが建てられたこともあり、原別川に雪を捨てている。整備工事により、雪捨作業も格段に楽になった）。下水道の整備により、（ある時期に比べ）水質も向上したに違いない。土手は整地され、転落事故のないように安全対策が施されている。立派な堤防で固められた川は、山から流れてきた水、雨水、雪解け水を確実に海へと導いている。

しかし、足りないものがある。草木がない。虫がない。ホテルは無理としても、川を中心とした生態系というものを全く感じない。渡り鳥たちもその川で食べ物を得ているのではなく、ただねぐらとして使用しているだけなのである。川は流れているが、それだけである。近くの海からまぎれこんだのだろうか、たまに魚を目撃することもある。川の水に触ることもできない（数か所下に降りる階段が取り付けられてはいるが）。生命の営みが存在するのかを確かめることができない。このような環境にある原別川は、まさに「排水路」といった面持ちである。

この川は幸せだろうか？ 私には、きれいな服を着せてもらったけれど、自由に遊ばせてもらえない子供のようにも見える。友達も少ない（いない）かもしれない。なぜなら、付き合いたくとも、その川の環境がそれを拒むからである。人間と付き合いなくとも、虫や魚が友達になってくれればいいのであるが、現状をみるとそういう友達もいないようである。あまりにも容姿が綺麗な人には近寄りたいたいという状況と同じであろうか。子供のころにはある恐さを感じていた私ではあるが、異次元空間に存在するその川に神秘性も感じていた。

このレポートを書いて気づいたことであるが、結局のところ、この川は昔も今も友達が少ないのだと感じている。そういう川なのである。しかしである。せつかく人の手を加えたのであれば、せめてもう少し親しみやすい姿にできなかったかと思う。手を加える人間の意図によって川はいかなる存在にもなりうる。川の整備工事は親しみを造りだす目的ではなかったのであろう。その点から考えると、この川は不幸であるといえるであろう。なぜなら、少なくとも私が知る限り、以前は草木や虫に囲まれて存在していたのだから。